

登校に不安を感じる生徒やその保護者を対象にした学校説明会及び懇談会の実施と不登校生徒支援について

不登校生徒の状況

中学校 1 年生の後期から、起立性調節障害をきっかけに規則的な登校が困難になり、学習への遅れが生じ、徐々に登校できなくなった。午後の授業や、給食などを利用して登校することもあったが、進路選択への不安が大きくなっていた。

具体的な取組

○多様な進路先に興味のある生徒、登校に不安を抱える生徒向け学校説明会の実施

進路選択に関する保護者の要望もあり、教育支援センターで行う学校説明会よりも先に、校内で都立のチャレンジスクール校長を招いた学校説明会を開いた。また、会の後半では、不登校対応巡回教員とともに懇談会を実施した。

○S C との連携

保護者が S C との定期的な面談を通して、保護者がもつ不安感や懸念を和らげるように働きかけた。



←多様な進路先に興味のある生徒、登校に不安を抱える生徒向け学校説明会の様子

○不登校対応巡回教員による個別対応

進路選択について志望する進学先の入試対策のため、作文添削、自己 P R カードの作成などを不登校対応巡回教員が個別対応した。加えて、これまで十分にできなかった学習をやり直したいという気持ちから、学習の個別対応もするようになった。

○行事参加に挑戦

事前学習や事前指導などへの参加を促した。事前学習などは午後の時間帯で設定し、朝体調が良くない中でも参加できるようにすることで、参加できる日が増えた。

宿泊行事にも取り組むことができ、生徒自身のよい成功体験となった。

成果

学校説明会や懇談会を実施することで、不登校対応巡回教員が直接保護者や生徒に関わるきっかけづくりになり、その後の対応が進展するようになった。生徒の望むことに対応しやすくなった。

課題

個別対応に関する時間的、人的制限があり、対応時間の拡大が難しいなど課題が残る。

安心できる学校生活の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、集団の空間や慣れない場所・移動で体調不良になりやすい特性があり、転入した。不安や不調軽減のための炭酸飲料の持参を許可し、活動しやすい空間と少人数での学習環境の中で過ごしている。徐々に体調が安定し、朝の学活から登校することができ、どの教科も意欲的に学習に取り組むことができている。

具体的な取組

○「整える」登校日数の増加

ゆとりある生活時程の中で、校内別室を活用している。休み時間等に、開放的な空間でリフレッシュし、ソファでのんびりするなど、効果的に利用している。給食や全体の授業、放課後学習でも活用し、安心して学校生活のペースを整える場となっている。



○「分かる」学習内容の定着

教科ごとに学習の形態を工夫し、全体での学習、学年ごとの学習、グループ別指導等を生徒の実態に合わせて展開している。授業ではT.Tの配置、「学び直し」「学び合い」の時間を確保し、基本的な学習内容が分かるための支援を行っている。習熟度に個人差があるため、個別の質問にも丁寧に対応している。



○「つながる」生徒・家庭・機関との連携

当該生徒・保護者との連絡を特に大切にし、学習予定記入ノートを活用し、生徒の様子を丁寧に把握している。また、直通電話が設置されたことで、生徒・保護者が連絡しやすい環境を整えることができている。SCやSSW等、関係機関とも定期的に情報を共有し連携を図っている。



○体験活動の充実

学校生活での「楽しい」、体験学習での「できた」という経験を増やし、仲間とコミュニケーションを図り協力する場面が増え、充実した前向きな登校につながっている。



7月：かき氷納涼会 11月：ドライフラワーの作品制作

成果

登校が少ない生徒は「月曜日から金曜日まで続けて休まないこと」を目標に「出席率7割」を目標に、仲間や教職員と信頼・安心できる関係を継続し、より良い体制を構築してきた。その結果、11月までの出席率は、おおむね6割強で推移している。

課題

現在の環境で培った経験や自信と、家庭・学校・地域と連携していくことを卒業後も持続できる進路選択が課題である。

校内別室の取組について



不登校児童の状況

対象児童は、昨年度の2・3月は、それぞれ1日だけの登校だったが、本年度4月の校内別室支援開始後は、毎週登校できるようになった。9月以降は週2日以上校内別室に通えている。別室では自分のペースで過ごすことができ、別室支援員や、別室に通っている児童とも打ち解け、楽しく話すなどして過ごしている。

具体的な取組

○校内別室委員会の設置

校内別室委員会を設け、支援会議を行っている。別室支援員との連携は不登校担当教員と副校長が中心となり行っている。保護者との連携は不登校担当教員と学級担任が中心となり行い、入室時の面談は、目標を決め、その後、年3回、支援方針の修正、調整等を行っている。希望する児童・保護者はSCとの継続面談を実施している。

○環境整備のポイント

別室を静かで落ち着いた環境にするために、別室を別室利用の児童のみが利用できるよう配慮した。

プリントや辞書などを常備した。
在籍学級とのオンライン授業や個別学習を行う場所を設置した。

くつろげる場所を設置し、遊具・本・楽器などを常備した。

○個別支援のポイント

別室利用の児童が、その日にやることを決めるために、担任の提案と支援員との相談により、自己決定ができるようにしている。

可能な範囲で行う学習支援を実施している。

支援員や他の児童との会話等によりコミュニケーションを取っている。

○学級との関わりの維持

当該児童が興味・関心のある教科や行事への参加を担任から促している。また、給食は学級で一緒に食べたり、学級の児童に校内別室まで給食を運んでもらったり、学級へ給食を取りに行ったりして学級の児童と触れ合えるようにしている。また、休み時間に学級の児童の所に遊びに行く別室利用の児童がいる。

成果

別室利用の児童は、別室がなければ登校できなかったり、欠席が増えたりしている。別室が安心して過ごせる居場所になり、自分のペースで学習したり、別室利用の児童同士で新しい人間関係が生まれたり、行事や在籍学級の授業に参加できたりした。

課題

児童や保護者と相談し、児童のペースで着実に学習やコミュニケーション能力の向上を図ること。

校内別室指導について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校低学年の頃から、児童相互のコミュニケーションにおいて課題が見られた。中学年になって、特別支援教室の巡回指導を実施した。高学年になって所属する学級に入りづらくなり保健室登校するようになった。また、専門医のアドバイスをもらいながら過ごすも、学習に対して意欲の改善は図れなかった。

具体的な取組

○自分で時間割を作成する取組

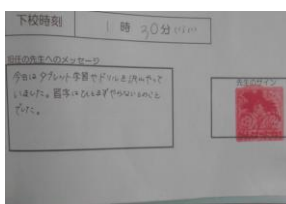
登下校時刻を自分で設定した上で、登校後に一日のスケジュールを作成する。下校時間も自分で記入する。

○自分で学習をすすめる取組

オンライン学習教材を活用して、自分のペースで取り組む。動画等を視聴後の採点は自分で行い、解説は支援員に聞くことも可能としている。

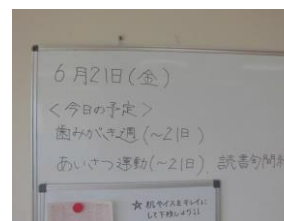
○別室指導の様子を担当へ連絡する取組

時間割に基づき取り組み方を自己評価する。自己評価に支援員からのコメントも記入し、担任に報告する。



○見通しをもつ取組

支援員は、毎日黒板にその日の行事予定を掲示する。掃除の時間の有無や給食のメニューについても、すぐ分かるようにする。



成果

- ・ 毎日、定時に登下校できるようになった。
- ・ 学習に向かう姿勢・意欲の向上が図られた。
- ・ 知識・技能が一定程度身に付くようになった。
- ・ 保護者の精神的な不安や焦りが軽減された。

課題

校内別室指導にて、学級と別室に通う児童をつなぐ役割としての支援員の対応の充実を図る必要がある。

校内別室の活用事例について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 5 年生であり、令和 5 年 9 月から学校に対する強い不安感から登校を渋るようになる。9 月から 12 月は保健室登校になり、令和 6 年 1 月に校内別室が開設した。それ以降、別室登校となる。学習に取り組みたいが気持ちはあったので校内別室指導支援員による学習支援を開始した。

具体的な取組

○担任・友達とのつながりを維持する工夫

学級とのつながりを維持するために、授業時間以外の時間には担任や友達と関わることができるよう教室に戻るようにした。

時 間	児 童	備 考
朝 8 時 20 分	(朝)は個別指導に参画する。 担任と時間を決めて、 個人用学習机のモニターボードに記入 ・課題を確認する(5分)	(朝)は、 ・課題の時は、保護者と一緒に教室へ行く。
授業時間	学習内容 1 オンライン授業 2 授業中の課題(ドリル、テスト、読書時間) 3 クラスで授業の進捗(質問や不明点など) 4 課題がない時は、自由時間 5 授業によっては、20分単位で学習する。	(午)は、 ・休み時間は、友達と話しやべりなし。 ・休憩は、休憩エリアで過ごす。 ・45分中、少しでも課題に取り組み。
中・昼休み	・クラスの席と座る。 ・教室で先生・友達と過ごす ・休憩	教室で先生・友達と過ごす 時間を意図的に設定
給食・掃除	(給)はクラスに入る。	
下校時	(給)はクラスで下校準備を始める。	

○支援シートの作成

児童の現状、利用している関係機関、当該児童や保護者の願い、主な支援内容を明記した指導計画を個別に作成し、細やかな支援を行えるようにしている。

現状
利用している関係機関
本人・保護者の願い
主な支援内容

個々の児童に対応した指導計画の作成

○児童自ら学習計画を立てる

児童が担任と相談しながら自ら校内別室で過ごす時間の学習計画を立てることで、児童自身が自主性をもって学習に取り組めるようにした。



○学習スペースと休憩スペースの設置

学習に取り組む場所と気持ちを落ち着かせる場所を分け、児童の状態に応じて休憩スペースを活用した。休憩スペースで気持ちを切り替えることができたなら学習スペースに戻るようにした。



成果

- ・校内別室利用は月 3、4 回程度になった。
- ・令和 6 年度は朝から教室に登校し授業に参加することが多くなった。
- ・出席率は 67.2%から 89.1%になった。

課題

友達と協働し学ぶ学習が十分ではないので、教室とオンラインをつなぎ、別室でも話し合い等に参加する等の工夫が必要である。

多様な関わりができる校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときから不登校傾向があり、中学校入学後は校内別室で支援を受けている。夏季休業日明けからは、遅刻しながらも毎日登校できるようになった。また、保護者・担任・学年教員・校内別室指導支援員が連携して支援することで、在籍学級の授業に参加することもできるようになった。

具体的な取組

○校内別室の目的

校内別室開設に当たって、設置目的を「学習保障、段階的な登校（学級）復帰、社会的自立」と設定し、落ち着いて学習や活動に取り組める別室環境となるよう配慮した。

また、利用する生徒の意思を尊重し、その日に取り組む活動や所属学級への参加等については、自己決定を大切にしている。

○支援員の複数体制

不登校対応巡回教員と校内別室指導支援員が、2人体制で交替勤務している。1人の生徒に対して複数の支援員が関わることで、複数の視点と多様な関わりから支援することができている。

また、タブレット端末を活用した学習支援を積極的に行っている。

○農園活動

全生徒にとって魅力ある学校を目指して、不登校の未然防止の視点から地域の農園と連携した体験的な学びや学校行事における係活動等を通じて、生徒同士が交流したり、活躍したりする機会を創出している。



○支援会議

毎週、管理職・生活指導主任・学年教員・不登校対応巡回教員・養護教諭で構成する支援会議を開催し、不登校生徒一人一人の情報を共有するとともに、支援の手だてについて検討している。

また、不登校対応に関する事例や情報を不登校対応巡回教員から共有することで、不登校に対する理解を深めている。

成果

校内別室での個別支援により、3人の生徒が継続的な登校ができるようになった。また、新規不登校者数が2人となっており、不登校出現率の大幅な減少を見込むことができる。

課題

校内別室の運営方法について、実態を踏まえて整備し、教職員の共通理解を図ることが課題である。